

国語総合

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を開いてはいけません。
- 2 解答用紙は、この冊子にはさんであります。
- 3 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 字数指定のある設問については、句読点・記号等も字数に含めるものとします。
- 5 試験終了後、この問題冊子は回収します。

1

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小説の中には時間が流れている。⁽¹⁾たとえば、三年のあいだに起きる出来事が語られるなら三年という時間が小説の中に流れる。一日のあいだの出来事を語るなら一日という時間が流れる。

A、小説の中に流れる時間は、われわれの現実生活のなかに流れる時間とは異なり、一定の速度を保って流れることはめったにない。ある一週間の出来事が長々と語られる一方、一年に余る時間が省略されてしまうことは珍しくない。一分しか要しなかったはずの出来事について数十ページが費やされるかと思えば、三年という時間の経過がたった一行で済まされてしまうこともある。

小説の中を流れる時間はつねに一定の速度で先へ先へと進むわけではない。十年前に時間が巻き戻されたり、五年先のこと予告されたりする。一週間前の出来事に話が飛んだかと思えば、ある出来事が マネくこと^(a) になる三日後の帰結が、出来事そのものが語られる以前に明らかにされたりする。同じ出来事が何度も繰り返し語られたり、何度もあったはずの出来事が一度しか語られなかったりする。

出来事をいかに語るかは出来事に流れる時間に縛られない。B、小説の中の時間は 澱んだり^{よど}、流れを早めたり、止まってしまったりする。遡ったり、先回りしたりする。同じ時間が反復されるかたわら、別々の時間が一つにくぐられてしまうこともある。

小説の中の時間とは、出来事を語るにあたって加工される時間のことである。小説の語りが時間をどう扱うかにかかわる。語りの中で時間がどのように処理されるかということである。

小説の語り自体も時間の流れの中にある。語りは先へ先へと進んでゆく。語りに要する時間を考える必要もある。

ここに一つの難問が浮かびあがる。小説の語りは読まれることを前提とする。小説のテキストは読まれることによつてはじめて語りとして成立する。読まれないテキストは単なる紙の上の C 画面の上の 黒いシミにすぎない。語る時間を扱おうとするなら、テキストが読まれる時間をあわせて考慮しなくてはならない。これをどう考えれば

よいか。

小説を読む読者が実際にどのようにテキストを読むかを予測するのは不可能に近い。まず速度の問題がある。小説の一ページを三十秒で読む読者もいれば、三分かける読者もいる。外国語の小説なら、三十分あるいは三時間かける読者がいてもおかしくはない。小説のテキストが読まれる標準的な速度を想定することは難しい。したがって、あるテキストが読まれるのに要する時間を予想することもできない。

(2) ミヒヤエル・エンデ（一九二九〜一九九五）の『はてしない物語』（一九七九年）は、本を読むスピードそのものが語られている面白い例である。主人公の少年バスチアンは、古書店からヌスんだ本を持って、学校の屋根裏部屋に閉じこもり「はてしない物語」を読み始める。同時に、読者もまたバスチアンが読んでいる物語を読み始める。物語の提示にはある工夫が施される^{c)}。バスチアンが読み、読者もまた読むことになる「はてしない物語」は緑色の活字で、バスチアンが生きる「現実の」世界の「ビヨウシヤは赤い活字で印刷される。緑色の活字のテキストがしばらく続いたあと、ところどころに赤い活字のテキストがあらわれ、バスチアンが耳にする塔の時計の音が一時間ごとに言及される^{e)}。そのことで、バスチアンが生きる「現実の」世界において一時間が経過したことが分かる仕掛けになっている。同時に、バスチアンが「はてしない物語」の（緑色の活字の）テキストを読むのに要した時間がほぼ正確に分かる。

X。バスチアンが一時間かけて読む分量のテキストを一時間で読む必要はない。エンデが想定する年少の読者ならバスチアンの読む速度は標準的なものかもしれない。が、もつと遅く読む読者がいても、早く読む読者がいてもおかしくない。大人の一般読者ならおそらく一時間はかからない。バスチアンの世界に流れる一時間という時間はあくまで仮構の一時間であり、バスチアンが物語のテキストを読む速度も仮構の速度である。読者にとっての Y でどれほどの時間が経過するのかが判断がつかない。

読者は、小説の語りをはじめからおわりまで、語られている通りに、語られている順序で読むわけでもない。出来事の発端を読んだあとすぐに（こっそり）結末を確認しようとする読者もいることだろう。途中の数ページ、数十ページ

を読み飛ばしてしまう読者もいる。テキストが実際にどのように読まれるか、あるいは読まれないかは、ほとんど予測がつかない。小説のテキストにシテキ(f)できる時間の処理が、テキストが読まれる現場において期待通りに機能するかどうかはまったくわからない。

⁽³⁾ フリオ・コルタサル（一九一四～一九八四）の『石蹴り遊び』（一九六三年）では、二つの異なる読み方が作者によって指示される。はじめに読者は、第一章から最終章であるとされる第五十六章までを順序よく読むよう促(g)される。読者はまずここで戸惑いを覚える。手にしている本には第五十六章のあと、さらに第五十七章から第百五十五章までが収められているからである。次に読者は、二つ目の読み方として以下のような順序を作者によって指示される。これははじめの章立てとはまったく無関係であるように映る。以下に、作者による指定のはじめの部分だけを引いてみる。

73—1—2—116—3—84—4—71—5—81—74—6—7—8—93—68—9—104…

この順序に従って小説を読み進めようとする読者のベンギ(h)を図って、たとえば第七十三章の末尾には「第一章」という指示が記される。この指示に従うことにより、読者は同じ小説をまったく異なる順序で読むことを求められる。

これは、同じテキストに異なる二つの読み方が期待される小説の例である。だが、果たして読者が作者の要求通りに同じ小説を二度読むかどうかは、保証の限りではない。『石蹴り遊び』の第五十七章以下を、第五十六章に続けて「順序通りに」読もうとする読者がいても不思議ではない。

小説の時間を考える際、難問として浮かびあがる読者の問題は、小説のテキストを考えるにあたりつねに考慮しておく必要がある。読者の存在は小説のテキストをめぐるあらゆる問題にかかわるが、読者が「現実の」時間のなかで実際にどのようにテキストを読むのかを、一般化して論じることはきわめて困難である。ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』（二八八〇年）をまったく中断することなく、同じスピードで読み続け、読み通す読者を想定することは現実的でない。読者が一気に読み通すことを期待して書かれたとされるポウの『黒猫』（一八四三年）を読むにあたり、途中

で何度か休息をはさもうとする読者がいておかしくはない。小説を読み進める読者がどこで本を置いて休息し、立ってお茶を飲もうとするか、などということを理論的に考察しようとしても無意味である。

小説の語りにおける時間の問題を考えるにあたってさしあたり可能なのは、書かれているテキストにおいて時間がどのように処理されているか、テキストの語りにおいて時間がどのように扱われているかを考えてみることだということになる。

(菅原克也『小説のしくみ』による。設問の都合で本文を一部改めた。)

問一 線部(a)～(h)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 本文中の空欄 A C に当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オのうちから一

つ選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-------|---|------|
| ア | A | つまり | B | したがって | C | あるいは |
| イ | A | ただし | B | しかし | C | すなわち |
| ウ | A | ただし | B | したがって | C | あるいは |
| エ | A | つまり | B | しかし | C | すなわち |
| オ | A | ただし | B | しかし | C | あるいは |

問三

——線部(1)「小説の中には時間が流れている」とあるが、小説の中に流れている時間にはどのような特徴があるか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 小説の中に流れている時間は小説の語りによって加工されたものであって、「現実の」時間のように一定の速度を保つたり一定の方向に流れたりすることはない。

イ 小説の中に流れている時間は一定の速度で一定の方向に流れる「現実の」時間とは違って、小説の語りによってその速度や方向などをさまざまに加工することができる。

ウ 小説の中に流れている時間は「現実の」時間と同様、その流れ自体を止めることはできないが、読者はその速さや方向を自由に変化させることができる。

エ 小説の中に流れている時間は小説にとって必要不可欠な要素であるが、その速さや方向が小説の語りによってどれも不自然に加工され、非現実的なものになっている。

オ 小説の中に流れている時間は「現実の」時間に縛られる必要のないものであるが、そのほとんどは現実とほぼ同じ速度で、同じ方向に流れていくことが多い。

問四

——線部(2)「ミヒヤエル・エンデ(一九二九～一九九五)の『はてしない物語』(一九七九年)は、本を読むスピードそのものが語られている面白い例である」とあるが、「本を読むスピードそのものが語られている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 『はてしない物語』では、バスタアンが「はてしない物語」という本をどれくらいのスピードで読んでいるのかを示すことによって、読者がこの本を読むのに要する時間を正確に予測することができるようになっていくこと。

イ 『はてしない物語』では、物語を読むのに要する標準的な時間が他のテキストとは別の色の活字によって示されていることによって、この本をどれくらいのスピードで読めばいいのかが読者にはっきりと分かるようになっていくこと。

ウ 『はてしない物語』では、バスタアンが生きている世界での時間の経過が具体的に示されていることによって、バスタアンが「はてしない物語」という本をどれくらいのスピードで読んでいるのかが読者に分かるようになっていくこと。

エ 『はてしない物語』では、バスタアンが耳にする塔の時計の音が一時間ごとに言及されることによって、読者がこの本のそれぞれの場面をどれくらいのスピードで読まなければならないかが具体的に指示されていること。

オ 『はてしない物語』では、バスタアンがこの本を読むスピードを示すことをとおして、バスタアンと読者のそれぞれの世界に流れている「時間」というものがこの本の最も重要なテーマであることが分かるようになっていくこと。

問五

本文中の空欄

X

に当てはまる内容として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号

で答えなさい。

ア そのため、読者は特に意識しなくてもバスチアンと同じ速度で緑色の活字のテキストを読んでいくことができる

イ しかし、読者がバスチアンと同じ速度で緑色の活字のテキストを読もうとしても、それは無理なことである

ウ したがって、読者はバスチアンとほぼ同じ速度で緑色の活字のテキストを読んではいけない

エ だからといって、読者もまたバスチアンと同じ速度で緑色の活字のテキストを読まなくてはならないということはない

オ もちろん、読者は緑色だけでなく赤色の活字のテキストも読まなければならないため、バスチアンと同じ速度になることはない

問六

本文中の空欄

Y

に当てはまる言葉を、

の部分の中から七字で抜き出なさい。

問七

——線部(3)「フリオ・コルタサル(一九二四—一九八四)の『石蹴り遊び』(一九六三年)では、二つの異なる読み方が作者によって指示される」とあるが、作者による「指示」についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア この指示は、作者から読者に対する一方的な要求でしかなく、読者の読み方を縛ることはできないが、ほとんどの読者は何の疑問も抱かず、作者の指示に従って小説を読んでいく。

イ この指示は、作者が通常とは違った小説の読み方を指示するもので、読者が戸惑わないようにさまざまな工夫が施されてはいるものの、読者はその指示に従って読むことはほとんどない。

ウ この指示は、作者の意図に沿って小説を読ませようとするものであるが、読者の読み方を確実に縛ることができるものではないため、読者が必ずしもその指示に従うとは限らない。

エ この指示は、作者が読者に期待する読み方にすぎず、読者が必ず従わなければならないといったものではないが、他の読み方では小説が成り立たないため、結果的に読者は作者の指示通りに読まざるを得ない。

オ この指示は、作者が小説の読み方を限定しようとするものであるが、小説をどのように読むかは読者の自由であって、そうした自由を奪おうとすることへの反発心から、作者の指示にあえて従わない読者も少なくない。

問八

本文の内容に合致するものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 小説の中の時間には、小説の語りの時間と読者が読む時間の二種類があるが、小説をどのように語るかは語りの、小説をどのように読むかは読者の自由であり、その速さや順序は語り方や読み手によってさまざまであるため、そうしたものを理論的に考察し、一般化しようとするのは意味のないことである。

イ 小説のテキストというものはそれだけでは単なる黒いシミにすぎず、読者に読まれることによって始めて語りとして成立するものであるため、小説の中の時間について考えるときには、小説の中で語られる非現実的な時間よりもむしろ、読者がテキストを読む現実的な時間に目を向けることが大切である。

ウ ある小説の一ページを三十秒で読む読者もいれば三分かける読者もいるなどといったように、読者がテキストを読むスピードはさまざまであるが、ほとんどの読者は同じような読み方をするため、例外的な読み方をする読者を考えなければ、読者の時間も小説の中の時間と同じように一般化して論じることができるようになる。

エ 『カラマーズフの兄弟』や『黒猫』を読者がどのように読むのかなどといったように、個々の小説について読者の読み方を考察するのは無意味なことであるが、読者という存在は小説のテキストをめぐるあらゆる問題にかかわるものであるため、読者がどのようにテキストを読むのかを理論的に考察することは小説の時間を考えるうえで大変重要なことである。

オ 一分間の出来事に数十ページを費やしたり、三年間の時間の経過を一行で済ませたりするなどといったように、小説の中の時間はさまざまな出来事を語るにあたって加工されたものであって、小説の中の時間の処理の仕方について考察することは可能であるのに対し、そうした小説を読者がどのように読むのかを一般化して論じることは困難である。

2

次の各問いに答えなさい。

問一

①～④の [] に適語を入れ、ことわざ・慣用句を完成させたい。最も適切なものを、後の語群のア～クのうちから、それぞれ一つずつ選び、符号で答えなさい（同じ符号は二度使わないこと）。

① 念頭に []

② 外堀を []

③ 気脈を []

④ 蘊蓄うんちくを []

語群

ア 正す

イ 通じる

ウ 外す

エ 置く

オ 傾ける

カ 運ぶ

キ 与える

ク 埋める

問二

①～③の [] に適語を入れ、四字熟語を完成させたい。最も適切なものを、次の各群のア～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、符号で答えなさい。

① 我田 [] 水

ア 印

イ 院

ウ 飲

エ 引

オ 因

② 綱 [] 肅正

ア 紀

イ 期

ウ 記

エ 機

オ 輝

③ 文人墨 []

ア 各

イ 画

ウ 格

エ 閣

オ 客

問三 「過去に例がなく、これからも起こりそうもない」という意味で用いられるものを、次のア～オのうちから一つ

選び、符号で答えなさい。

- ア 未来永劫 えいじょう イ 五里霧中 ウ 空前絶後 エ 大器晩成 オ 東奔西走

問四 「大きな危険を冒さなければ成功することはできない」という意味で用いられるものを、次のア～オのうちから

一つ選び、符号で答えなさい。

- ア 石橋をたたいて渡る イ 溺れる者は藁わらをもつかむ ウ 君子危うきに近寄らず
エ 虎穴に入らずんば虎子を得ず オ 人事を尽くして天命を待つ

問五 二つがどちらにも宮沢賢治の作品であるものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

- ア 虞美人草 ぐびじんそう 田舎教師
イ 銀河鉄道の夜 カインの末裔 まっえい
ウ あめりか物語 よだかの星
エ 田園の憂鬱 野菊の墓
オ 風の又三郎 またさぶろう ポラーノの広場

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

県立高校の図書室で働いている詩織^{しおり}は、司書の資格を取るために通信制の大学に通い始めた。

「そんなわけで、『古代・中世・近世・近代以降にかけての図書館発展の特徴を骨太に要約して私見^①を述べよ』って
いうレポートを書かなきゃならないんです」

日曜日の午後、詩織は市立図書館のレファレンスコーナーにいた。

「でも図書館史のテキストの文章って、どうも硬くて分かりにくいんですね。私、司書^(a)ケンシユウで教わるような、
もっと実践的な話を期待してたんですけど」

レファレンス担当は司書の山村さんだった。すっかり顔なじみなので、詩織の話も相談から愚痴の方に逸^それていく。
「簡単なことをわざわざ難しく言ってるみたいで——図書館史はテーマが定まっているからレポートも書きやすいかと
思ってたけど、どう書いていいか、さっぱり見当つかないんです。だから⁽¹⁾こちらの図書館で、もっと分かりやすい参
考資料を探したいなと思ってまして」

大学のテキストは、細々とした情報まで全部まとめて一連の文章になっているようだった。しかも難しい言葉で硬い
文章に仕立ててあるものだから、読んでいてもどうもぴんとこない。読み進めているつもりが、目で文章を追っている
だけで頭には全く入っていないこともしばしばだった。

図書館^(b) 概論はまだよかった。各種の図書館の意義や機能といった話から始まっていたので、自分が働いたり利用し
たりした経験と重なるところもあったし、簡単なノートを作ってまとめながら読んでいた。しかし、図書・図書館史と
なると、⁽²⁾ のつけから古代西洋の図書館の話が続き、馴染^{なじ}みのない地名や人名のオンパレードだった。ノートをとろう
としても意味不明のカタカナの羅列になったし、レポートを書こうにもとっかかりが掴^{つか}めないのだ。

⁽²⁾ これじゃあいけないと思って市立図書館に来た。職場の休み時間に司書^(c) 教諭の若森先生に質問する手もあったのだ

が、彼よりは山村さんのレファレンスサービスの方が頼りになりそうな気がしたのだ。

しかし当の山村さんは、詩織の相談に困ったような表情を浮かべた。

「だけど、大学のアカデミズムってそういうもんじゃないですかね。知識を体系的に網羅して、一般的で間違いのない理論としてまとめるのが目的なわけですから。学問的に系統だてた文章はどうしたって理屈っぽくて硬くなるもんですよ」

大学で学ぶのに難しいことを毛嫌いしたら始まらない、とでも言いたそうな口ぶりだった。もっと優しく応じてもらえるかと思っていた詩織としては、出端を挫かれた気分である。

そういうえば理屈っぽい人だったのを思い出した。小学校に上がる前から、サンタクロースの正体をつきとめようと考えて作戦を立てるような人なのだ。プロの司書なのだし、学校の成績だってよかったようなタイプである。文章が硬かろうが難しかろうが気にもならないのかもしれない。

そういう人に相談したのが間違いだったのだろうか。³⁾しかしこの際だから、もうちょっと食い下がってみることにした。

「でも……たとえば図書館の歴史に興味を持った高校生がいたら、大学の学問っぽいのは違う本をすすめたりしませんか？」

司書だったら易しい本をすすめる機会だってあるはずだ。^{なまほら}直原高校の図書室でそういう相談を受けたとしたら、自分はどう応じるべきだろう。山村さんで実験してみるような気分だった。

「そうですね……」

山村さんは眼鏡を指で押し上げた。丸いレンズ越しに、まじまじと詩織を見つめてくる。

慣れないとちよつと照れてしまうような視線だけれど、これは彼の癖らしい。近眼の上、相手をじつと見ながら頭を回転させる人なのだ。

「……図書館史関連の資料でしたら010の図書館学のタナに何冊か並んでますから、高校生であってもまずはそれ

をおすすめしますね。書架を眺めるだけでも参考になりそうだし」

「じゃ、もっと大雑把に掴める本がいいって言われたら？ 古代はこうだった、中世はこうだった、みたいのに、それぞれ一言でまとめるような本はありませんかって相談されたらどうします？」

我ながら勝手なことを言っているとは思う。だけど図書館利用者とはそういうものだという気がするし、「骨太に要約」というのが課題なのだ。レポートを書くにあたってもまとめの情報がほしいのにテキスト以上に難しい本を薦められたって困る。図書館史の全体的なことを、ぱっと把握できるような本を期待していた。

「うーん……」

山村さんは再び思案顔になった。まっすぐな視線が詩織に向いたが、詩織はなんとかそれを受け止めた。

やがて、その視線がやわらいだ。どうやら考えがまとまったらしい。

⁴⁾「それじゃ、まずは図説から入ってみるってのはどうでしょう？」

「図説？」

「図説本、って言い方は一般的じゃないかもしれませんが、絵や図や写真を載っけながらあれこれ解説してくれる本のことです。大雑把に理解するなら、デジタル情報が一番ですもんね」

検索機に何か打ち込まれた。プリンターが動き出し、書誌情報がプリントアウトされる。

その紙を手渡された。『図説 本の歴史』と『図説 図書館の歴史』という書名が目についた。

「さっき図書館史っておっしゃってましたけど、正式な科目名は『図書・図書館史』じゃありませんでしたか？」

「あ、そうです」詩織はテキストの表紙を思い出した。「——さすが、お見通しですね」

「まあ僕も大学でとつた科目ですから。——っていうか、一緒にされてますけど図書史と図書館史は、別々の学問です。ほら、ちょうどこの二冊のタイトルと一緒にです。図説を見るにしても、本の歴史と図書館の歴史、両方に目を通せば見えてくるものがあると思いますよ。『本の歴史』は日本の本で、『図書館の歴史』は翻訳物ですが、どちらも写真や図が多くて分かりやすい資料です」

「……なるほど」

「あとは、児童コーナーの書架で探してみるのもおすすめですね。絵本とか児童書というと、レイコウがあるかもしれませんが、ビジュアル要素を強く出しながら要点を押さえてるって意味じゃ、大人でも参考になることは多いはず」⁽⁵⁾
再び書誌情報がプリントされた。今度は『本と図書館の歴史』と『図書館のひみつ』と『図書館のヒミツ』、三つの書名が並んでいた。

「どれも絵とか写真とかが多い資料です。とにかく一通りページをめくってみれば、いろんな時代の図書や図書館について、こういう感じだったというのを把握しやすいと思いますよ」

詩織の要望にすっかり応えてくれた形だった。アドバイスしてくれる山村さんの声も満足げだ。

しかし詩織は、すぐにはおレイが言えなかった。につこりと笑顔を作るまで、ちよつと間が空いた。

「……分かりました。ありがとうございます」

頭を下げて書架に向かいつつ、なんだか悔しいような思いを抱いている自分に気づいた。気づいてから、なんでそんな気持ちになるのか不思議になった。

あれこれ身勝手なことを言っておいて、それが叶えられて悔しいというのだから、我ながら始末に負えない。——書架を回って書誌情報の五冊を探しながら、じわじわと自己嫌悪を感じていた。

どこかで、プロの司書に向かって無理難題を言ってみたい気持ちがあつたのかもしれない。難しい相談をしたつもりだったのに、あっさり解決されてしまった。あらためてプロの力と、自らの至らなさを思い知らされた。それでいじけた気分になっているのなら世話はない。

もつと勉強したら、今回みたいなレファレンス相談などしなくても、自力で目指す資料に辿りつけるようになるのだろうか。——そんなことを考えながら五冊の本を集め、ついでに「010・図書館学」の書架を一通り眺めていった。自分でも、何か参考書になりそうな本を見つけておきたかったのだ。

（竹内真『図書室のピーナッツ』による。設問の都合で本文を一部改めた。）

問一 〓線部(a)～(h)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 〓線部①～③のそれぞれの言葉の本文中での意味とほぼ同じ意味の言葉として最も適切なものを、次の各群

のA～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、符号で答えなさい。

① 私見

A 大まかな感想 I 新しい考え U 公平な評価

E 問題となる点 O 自分なりの意見

② のつけから

A 初めから I ずっと U しばらく

E 途中から O だんだんと

③ まじまじと

A 何度も繰り返し I いきなり U 視線をそらさないで

E 不思議そうに O ばかにしたように

問三

——線部(1)「だからこちらの図書館で、もっと分かりやすい参考資料を探したいなと思ひまして」とあるが、このような詩織の要望を聞いた山村さんの様子や心情についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 詩織が市立図書館に何らかの参考資料を探しに来たということは分かったものの、話の内容があまりにも漠然としていて要領を得ず、どんな資料が必要なのかが分からなくて困惑している。

イ 大学のテキストについて詩織の言うことはもっともで、図書館司書としてなんとか協力したいとは思ったが、「もっと分かりやすい参考資料」に心当たりがないため、大学のテキストで学ぶしかないだろうと思っている。

ウ 詩織は大学のテキストよりもっと分かりやすい参考資料を探したいなどと言っているが、大学のテキストの文章が硬くて分かりにくいのは当然であつて、詩織の言っていることは筋違いなことだと思っている。

エ 詩織がレポートの参考になる資料を探すために相談に来たことはよく分かっているが、必要な資料を自分自身で探すことも大事なことだと思つているため、安易に他人に頼ろうとしている詩織の態度にあきれている。

オ 詩織も図書館の利用者の一人であるため、他の利用者と同じように対応しなければならないということは分かっているが、顔なじみだからといって愚痴をこぼしたり身勝手な要望を出したりすることに不快感を募らせている。

問四

——線部(2)「これじゃあいけないと思って市立図書館に来た」とあるが、詩織は市立図書館にどのような本を探しに来たのか。そのことが端的に分かる部分を本文中から二十五字で抜き出しなさい。

問五

——線部(3)「しかしこの際だから、もうちょっと食い下がってみることにした」とあるが、このように食い下がって相談することについて詩織はどう考えているか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 司書に「食い下がる」のは身勝手なことだとは思わないが、司書や他の利用者のことも考えるとほどほどにしたほうがよいとも思っている。

イ 司書にいろいろな相談をするのは問題ないが、だからといって必要以上に「食い下がる」ようなことはしてはならないと思っている。

ウ 司書に「食い下がる」のは身勝手なことだとは思う一方、図書館利用者にはそういう人が多いのではないかと考えている。

エ 司書にいろいろな相談をする人は多いが、身勝手だと思われるほど「食い下がる」ような人はほとんどいないだろうと思っている。

オ 司書に相談するのは図書館利用者として当然の権利であって、納得のいくまで「食い下がる」のもなんの問題もないことだと思っている。

問六

——線部(4)「それじゃ、まずは図説から入ってみるってのはどうでしょう？」とあるが、山村さんから「図説本」を薦められた詩織についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 山村さんから図説本についての説明を聞いた詩織は、それが大学のテキストとは違って写真や図が多くて分かりやすいものだったために満足し、図説本さえあれば「骨太」なレポートを簡単に書くことができると確信した。

イ 図説本やそのあとに薦められた絵本や児童書は、写真や図などのビジュアル要素を強く出しながら要点を押さえた分かりやすい資料だという説明を山村さんから聞いた詩織は、自分の目的に合った資料が見つかったことに満足していた。

ウ 山村さんの説明を聞く限りでは、図説本や絵本や児童書は、自分の目的に合った資料のように思ったが、自分の目で実際に内容を確認してみないと、それが本当に役に立つかどうかはまだ分からないと詩織は思っていた。

エ これまで図説本というものがあることを知らなかった詩織は、自分の目的に合う資料は見つからないだろうと思っていたが、山村さんから薦められた資料に一通り目を通すと、予想外によい資料が見つかったことに喜んでいた。

オ 山村さんの説明で、図説本や絵本や児童書は写真や図などが多くて分かりやすい資料だということはよく分かったが、山村さんも言うように、こうした子ども向けの資料だけではレポートをまとめるにはもの足りないと感じていた。

問七

——線部(5)「探してみるのも」とあるが、この部分の「も」の意味用法と同じものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア どんなにおかしくても笑ってはいけない。

イ けがをして学校を一週間も休んでしまった。

ウ 想像をあたかも事実であるかのように話す。

エ 仕事ばかりでなくゆっくり休むことも大切だ。

オ 明日は久しぶりに映画でも見に行かないか。

問八

詩織が相談をもちかけた山村さんはどのような人物か。その内容を次のようにまとめたとき、に当てはまる言葉を本文中から五字で抜き出しなさい。

山村さんは、大学のテキストの文章のように性格の人ではあるが、自分の考えを押し付けるのではなく、詩織の身勝手な要望にも親身になって応えようとする「プロの司書」だということが出来る。

問九

本文の内容に合致するものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 図書館司書になるための勉強をしている詩織は、プロの司書である山村さんに自分では難しいと思うような相談をしたにもかかわらず、それを簡単に解決されてしまったことに悔しさを感じ、自分の実力のなさを実感するとともに、山村さんを自分の実験のために利用するようなことをしたことを後悔していた。

イ 日頃からしばしば市立図書館を利用し、山村さんと顔なじみになっていた詩織は、山村さんの司書としての実力がどれほどなのかを確かめるために無理難題を言ってみたが、山村さんがそれらを簡単に解決したことにショックを受け、山村さんのような司書になるにはもっと勉強をしなければならぬと決意を新たにしました。

ウ 詩織は自分の力では解決することのできなかつた難しい問題を山村さんに簡単に解決されてしまったことによつて自らの至らなさを思い知らされ、いじけた気分になってしまったが、いつまでも悔やんでばかりいても仕方がないとすぐに思い直し、次に図書館に来たときにはもっと難しい相談を試してみようと考えていた。

エ レポートを書くための資料を探すために市立図書館に来た詩織は、当初の目的はすぐに果たすことができたにもかかわらず、「実験してみるような気分」で山村さんにさまざまな無理難題を言ってしまったことを深く反省する一方、なぜそのような身勝手なことをしてしまったのか、その理由がよく分からなくて困惑していた。オ 自分では難しいと思っていた問題を山村さんに簡単に解決され、自らの至らなさを思い知っていじけた気分になってしまった詩織は、そうした気分にならないようにするために、これからは本当に必要な資料を探すときには山村さんのような人に頼るのではなく、自分の力で見つけるようにしなければならぬと思っていた。

